

近代日本語における欧文の直訳による表現の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木下, 孝雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16712

2013年度 文学研究科

博士学位請求論文（要旨）

近代日本語における欧文の直訳による表現の研究

学位請求者 日本文学専攻
八木下 孝雄

内容の要旨

1. 本研究の問題意識と目的

近代は、さまざまな局面で、日本が西欧と対峙し、大きな影響を受けた時代であった。言語も例外ではなく、西欧の言語は、日本語の語彙・文法・文体等に大きな影響を与えた。たとえば、欧文を直訳的に翻訳した表現は、それまで日本語にはなかった発想を促し、新しい表現構造を産んで、日本語を活性化した。そのような欧文直訳表現について、これまでの研究では、それと目される表現とその用例を列記するにとどまるものが多く、詳細に分析・考察したものは多くない。また、その対象とする表現についても、一定しているわけではなく、表現の範囲や種類が研究者によって異なっているという現状がある。本研究は、明治期において日本語に大きな影響を与えた要因である欧文直訳表現について調査・分析を行うことで、それらがどのような仕組みを持ち、どのような特徴を持っているのか明らかにすることを目的とする。

2. 本研究の構成ならびに各章の要約

本研究は、以下のような構成で行った。

まず、序章において、本研究の目的、先行研究、欧文直訳表現の確認、本研究の構成の確認、凡例の説明を行った。

第1部では、明治期の英語教育・英語学習における、動詞に関する訳出法について調査・分析を行った。明治期の英語教育や英語学習で使用されていた、リーダーの教科書には、参考書としての役割の訳本が存在した。

その訳本の訳文は、英単語にそれぞれ訳語を施し、返り点としての数字を振って、数字通りに順番を入れかえながら読むような、漢文訓読ならぬ、欧文訓読の方法が主に用いられていた。第1部第1章ではそのリーダーの中から、*New National 1st Reader* の訳本における訳出法について Charles Barnes の *New National 1st Reader* の原文と、その訳本である、三上精一訳『ニューナショナル第一リード独稽古』（明 18.8）を用いて調査を行った。第1部第2章では同じく英語リーダーの教科書である *New National 2nd Reader* の訳本における訳出法について、*New National 2nd Reader* の原文と、その訳本である、三上精一訳『ニューナショナル第二リード獨學』（明 18.11）を用いて調査を行った。第1部第3章においては *New National 3rd Reader* の訳本における訳出法について、*New National 3rd Reader* の原文と、その訳本である、島田奚疑訳『正則ニューナショナル第三読本直訳』（明 19.9）を使用して調査を行った。第1部第4章においては、第1部について総括し、分析・考察を行った。

第2部では、翻訳文における訳出法について調査・分析をした。英語教育や英語学習以外の翻訳文においてどのような訳出がなされているのか明らかにすることが目的であった。第2部第1章では Arthur Conan Doyle の *The Boscomb Valley Mystery* の翻訳における訳出法について、原文とその訳本である、喜三訳「坊主ヶ谷の疑獄」（慶応義塾学報、明治34年4月）、手塚雄訳「死刑か無罪か」（東西社、明治42年3月）、の2種の翻訳資料を用いて調査をした。第2部第2章では Samuel Smiles の *Self-Help* の翻訳における訳出法について、中村正直訳

『西国立志編』と畔上賢造訳『自助論』の2種類の翻訳資料を対象として原文と対照し、それぞれ調査し分析した。第2部第3章においては、第2部について総括し、分析・考察を行った。

第3部では、翻訳以外の日本語文章における欧文直訳表現について調査・分析した。第3部第1章では夏目漱石の文章において『夏目漱石全集 第十六巻 評論ほか』（1995年4月、岩波書店）を資料として欧文直訳表現の調査・分析を行った。第3部第2章では芥川龍之介の文章において、『芥川龍之介全集』（1995-1998、岩波書店）を資料として、欧文直訳表現について調査し、分析を行った。第3部第3章では、第3部について総括し、分析・考察を行った。

終章においては、本研究の全体のまとめと、全体を通しての考察を行った。

調査・分析を行った結果は以下のような結論が得られた。

第1部では、調査分析の結果、第1章から第3章までに使用した資料において、欧文訓読の訳出法にパターンがあることが明らかになった。動詞に関する訳出法について、基本の動詞の訳に、過去形や未来形などの時制の訳出パターンや、否定や疑問などの表現の訳出パターンを動詞の訳の後ろに付け加えていくことで訳文を作成していることがわかった。また、訳出パターンを結合させる順番についても、規則があることがわかった。また、do や be 動詞などの助動詞としても用いられる動詞については、訳出パターンにおいて固定化されていることがわかった。訳出パターンの固定化があることで、訳文の内容理解にとっては訳出パターンが過剰になってしまい日本語としての違和感が感じられる。しかし、欧文訓読の、一語も残さずにすべての単語を訳文に置き換えるという態度がこのことからみることができた。また、訳本の翻訳者による訳出法への影響もそれほど大きく見られないことがわかった。

第2部の英語教育・英語学習以外の翻訳文、つまり、小説や啓蒙書の翻訳における訳出法では、欧文訓読の方法はあまり採用されていないことがわかった。したがって、欧文直訳表現はあまり見ることができなかった。ただし、第2章で行った、欧文訓読の訳出法確立以前と以後の翻訳資料を比較し、関係代名詞節の訳出法の詳細な分析をすることで、欧文訓読による訳出法の影響が見られることが指摘することができた。また、英語教育・学習以外の翻訳においては、原文が必要とされないことから、英語の構造について理解をする必要がないためや、

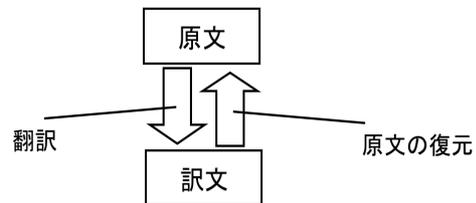
文体の高さを保つために、また、内容理解の妨げにならないようにといった理由で、欧文直訳表現が現れる欧文訓読の訳出法が避けられた可能性を指摘した。

第3部の調査の結果、第1章、第2章のどちらの資料においても、欧文直訳表現の用例が多く収集することができた。第1章と第2章の結果を比較すると、芥川よりも漱石の方が、数量的にも、表現の種類においても多く欧文直訳表現を使用していることがわかった。

終章における全体を通しての考察は以下ようになった。

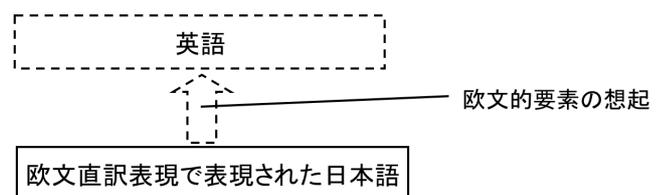
第1部で分析を行った調査から、欧文訓読の方法は、英語と日本語を強固に結びつけていることが確認できた。それは、欧文訓読の範となる漢文訓読からの性格を引き継ぐものであって、原文が重視される訳出法であるといえることができる。そのことから、欧文訓読の訳出法は原文の英語の構造の影響を強く受け継ぐ訳出法であるとした。また、以下の【図4-0-3】のように、強固な原文と訳文の結びつきが、原文からの翻訳だけでなく、逆に、訳文から原文の復元も可能であることを指摘した。それは、第1部で見たような do や be 動詞の訳出パターンが固定されていることからわかる。

【図4-0-3 欧文訓読における原文と訳文の関係】



また、その英語と日本語の結びつきから、欧文的要素が想起できるとした。以下の【図4-0-4】は、そのことを図式化して示したものである。

【図4-0-4 欧文的要素の想起の仕組み】



【図4-0-4】は、【図4-0-3】から、原文を省いたものである。つまり、欧文直訳表現は、原文がなくてもそこに原文である英語が透けて見えるような仕組みを持っていると考えられる。それは、欧文訓読によって、英語と日本語の結びつきが強固になっていることが前提となる。つまり、【図4-0-3】のような強固な結びつきがなければ、【図4-0-4】のように、欧文直訳表現から、それに対応する英語の表現が透けて見えることはない。ここで示した欧文的要素の想起は欧文訓読での強固な英語と日本語の結びつきが必要となるのだ。

そのような想起される可能性のある欧文的な要素は、第2部で使用したような一般向けの娯楽のための推理小説や、啓蒙書においては、内容理解の妨げとなってしまうため、翻訳の対象や目的により、訳出法が選択されているのだとした。

終章の最後に、今後の課題として残されているものとして、欧文直訳表現をより広い視野でとらえるため、近代日本語の成立や古代からの日本における翻訳の歴史などに関連させて研究を充実させる必要があることを示した。